

中学生の親子関係におけるテレビ視聴の影響について

太田昌子*・藤原八千代**

Masako OHTA and Yachiyo FUJIWARA
The Relationship between Junior High School
Students and their Parents under the Influence
of the Television in their Everyday Lives

Abstract: The aim of this investigation was to clarify the effects of the television in our lives upon the relationship between the parents and their children.

The subjects were 326 junior high school students in Matsue City.

First, the actual situations both of viewing the television in their everyday lives and of the communicative relationship between them and their parents were observed.

Secondly, the mutual relationship between the above-mentioned two situations were investigated.

We considered from the results that, under a good relationship between the parents and their children, the existence of the television increased more familiarity between them, but that, under an undesirable relationship between them, the existence of the television made matters worse.

緒言

近年におけるテレビ視聴時間の増大は、おとな、子どもを問わず家族を孤立化させ、その心情的結合をも弱めるとして懸念する声が強い。しかし一方では、ややもすれば閉鎖的、独善的になりがちな家庭生活に対し、外からの新しい情報を送り込むことによって、家庭の目を社会に開くと共に、夫婦・親子など異なる世代、性に属する家族相互の理解と融和に役立つという面があることも否めないであろう。いずれにせよこのような家庭生活に対するテレビの影響を的確に把握し、より望ましい視聴のあり方を考えることは、今後ますます高度化する情報社会の中では特に重要と思われる。

このようなテレビ視聴と家庭生活との関わりについては、これまでもいくつかの調査が行われた論じられているが⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾、ここでは中学生のテレビ視聴と家族関係、特に親子間の親和感との関連性を明らかにすることによって、今後の家庭教育のあり方を考える上での一助

としたい。

調査方法

1. 調査時期 昭和57年9月21日～9月27日
2. 調査対象 松江市立第二中学校1年生、男子160名、女子166名 計326名
3. 調査方法 質問紙法で無記名
4. 調査内容 大別すると次のとおりである。

(1) テレビ視聴の実態と意識(視聴時間、好きな番組、テレビをみる理由、テレビ視聴と家族との関わり)

(2) 両親との対話の実態と意識(対話の程度、対話時の感情、両親への親和感)

以上のような実態及び意識を把握すると共に、両者の関連性をみることによって、テレビ視聴と親子関係とが相互にどのように関わっているかを探ることとした。

結果及び考察

* 島根大学教育学部家政研究室

** 愛媛県川之江市立南中学校

表1. 調査対象者の家族状況

項目	種別	性別		
		男子	女子	全
家族区分	核家族	50.6%	60.8%	55.8%
	拡大家族	38.1	25.9	31.9
	単親家族	11.3	13.3	12.3
業母の親の有無	有	56.9	63.2	60.5
	無	37.5	30.1	33.7
	無答	5.6	6.6	5.8

表2. 平日における帰宅時刻, 就寝時刻

平日の帰宅時刻				平日の就寝時刻			
時刻	性別			時刻	性別		
	男子	女子	全		男子	女子	全
ア. 4~5時	3.1	3.6	3.4	ア. 8~9時	0.6	1.8	1.2
イ. 5~6時	8.1	10.8	9.5	イ. 9~10時	18.8	19.3	19.0
ウ. 6~7時	50.0	60.2	55.2	ウ. 10~11時	55.6	52.4	54.0
エ. 7時以降	38.1	25.3	31.6	エ. 11~12時	22.5	25.3	23.9
オ. その他	0.6	0	0.3	オ. 12時以降	2.5	0.6	1.5
				カ. その他	0	0.6	0.3

注: 帰宅, 就寝時刻は, 調査前日までの1週間でもっとも多かった時刻である。(土, 日曜を除く)

表3. テレビの視聴時間

平日(土曜: 休日を除く)				休 日			
時間	性別			時間	性別		
	男子	女子	全		男子	女子	全
ア. 30分以下	1.9	3.6	2.8	ア. 30分以下	1.9	1.2	1.5
イ. 30分~1時間	15.0	28.3	21.8	イ. 30分~1時間	3.8	6.0	4.9
ウ. 1~2時間	31.3	33.7	32.5	ウ. 1~2時間	16.3	25.3	20.9
エ. 2~3時間	30.6	21.7	26.1	エ. 2~3時間	26.9	27.7	27.3
オ. 3~4時間	13.1	8.4	10.7	オ. 3~4時間	25.6	18.7	22.1
カ. 4時間以上	6.3	4.2	5.2	カ. 4~5時間	15.0	11.4	13.2
無 答	1.9	0	0.9	キ. 5~6時間	6.3	5.4	5.8
				ク. 6時間以上	3.8	3.6	3.7
				無 答	0	0.6	0.6

注: 平日の視聴時間は調査前日までの1週間(土, 日曜を除く)で, 平均した1日の視聴時間を問うたものである。また, 休日の視聴時間は調査日に最も近い土, 日, 休日で, 平均した1日の視聴時間を問うたものである。

*印は比率の信頼区間法による検定の結果(有意水準5%), 有意差の認められたものである。表5~表11も同じ。

表4. よく見るテレビ番組(複数回答)

視聴率	男 子	女 子	全
0~10%	ワイドショー(4.4) 教育番組(6.9)	ワイドショー(4.8) 教育番組(7.2)	ワイドショー(4.6) 教育番組(7.1)
10~20	ホームドラマ(10.0) サスペンス(13.8) 時代劇(18.1) ドキュメント(19.4)	ドキュメント(12.0) 時代劇(12.7) 刑事もの(19.3) スポーツ(19.9)	時代劇(15.3) ドキュメント(15.6)
20~30		ニュース(24.1)	ホームドラマ(20.9) サスペンス(23.9) 刑事もの(26.7) ニュース(28.5)
30~40	ニュース(33.1) 刑事もの(34.4) 学園ドラマ(36.9)	ホームドラマ(31.3) 映画(32.5) ギャグ・コント(33.1) サスペンス(33.7)	スポーツ(38.3)
40~50	歌番組(40.6) ギャグ・コント(50.0)		ギャグ・コント(41.4) 映画(44.5) 学園ドラマ(48.8)
50~60	映画(56.9) スポーツ(57.5)	クイズ(58.4)	歌番組(53.4)
60~70	クイズ(66.3)	学園ドラマ(60.2) 歌番組(65.7)	クイズ(62.3)
70~80		マンガ(70.5)	マンガ(79.8)
80~90	マンガ(89.4)		

注: ()内は比率

1. 調査対象者のテレビ視聴の実態と意識について

まず調査対象者の家族状況をみると表1の通りである。すなわち核家族は約6割弱であり, 有職の母親を持つ者も約6割である。表2により対象者の帰宅, 就寝時刻(平日)をみると, 9割弱が6時以降に帰宅し, 10時以降に就寝している。このように勉強, クラブ活動などでかなり忙しいと思われる生活の中でのテレビ視聴時間をみると, 表3のようであった。すなわち平日では「ウ. 1~2時間」が約34%で最も多く, 次いで「エ. 2~3時間」の26%, 「イ. 30分~1時間」の22%であった。また3時間以上の視聴者も約16%あった。男女間で比較すると男子の方が女子よりやや視聴時間が長い傾向がみられた。また休日においては平日よりも約1時間長くなる傾向がみられた。

次に, 対象者たちがよくみるテレビ番組は何かを問うてみると, 表4のとおりであった。すなわち, 「マンガ(79.8%)」「クイズ(62.3%)」「歌番組(53.4%)」等は過半数の者が見ており, その他「学園ドラマ(48.8%)」「映画(44.5%)」「ギャグ・コント(41.4%)」等が比較的高率であった。逆に「ワイドショー(4.6%)」「教育番組(7.1%)」等は好まれていないようであった。また男女間はかなり好みの差がみられ, 「マンガ」「スポーツ」「ギャグ・コント」「刑事もの」「映画」等は男子が女子より高率であり, 逆に「ホームドラマ」「学園ドラマ」「サスペンス」「歌番組」等は女子が男子より高率であった。

次に, なぜテレビをみるのかを問うてみると, 結果は表5のとおりであった。すなわち, 「ウ. おもしろいから」(77.6%)「エ. いつも見ている番組の続きが見たいから」(61.7%)の二者が飛抜けて高率であり, さきの好まれる番組と合せて考えると, 対象者たちがテレビに

表5. テレビを見る理由(複数回答)

理 由	性 別		全
	男子	女子	
ア. 他にすることがなくてたいくつだから	21.3	15.1	18.1
イ. いつも見ているので見ないと落着かないから	15.6	13.9	14.7
ウ. おもしろいから	78.8	76.5	77.6
エ. いつも見ている番組の続きが見たいから	51.9	71.1	61.7
オ. 見ないと友だちの話題にはいっていけないから	11.3	21.7	16.6
カ. 本を読むより楽だから	13.1	11.4	12.3
キ. ためになるから	9.4	12.7	11.0
ク. その他	0.6	0.6	0.6
無 答	1.3	0.6	0.9

求めているものは、明らかに娯楽性と言える。

以上はテレビとの個人的な関わりをみたものであるが、次には家族関係との関わりについてみてみたい。このことについては、表6に示したようなAからKまでの11の設問を行い回答を求めた。まず問A～Cにより、「家族関係におけるテレビの有用意識」を問うてみると、「ア. 非常に」「イ. かなり」を合せると約7割は「役立っている」と答えており、「ウ. あまり役立っていない」と答えた者は約3割強であった。またその理由を問うてみると、「役立つ」と答えた者の理由としては、「イ. 共通の話題がふえたから」(43.6%)、「イ. みんなが集まる時間がふえたから」(33.5%)という答えが多かった。一方「役立たない」或いはむしろ「じゃまになっている」と答えた者の理由としては、「ア. お互いに話ができないから」(47.7%)が最も多くあげられており、次いで「イ. 家族が集まる時間が減ったから」(15.0%)、「エ. テレビをみるとしかられるから」(14.0%)がほぼ同程度に並んでいた。以上の結果からみると、同じテレビでもそれをみる家庭のあり方のちがいによって全く相反する評価が与えられるということがわかる。

次のD～Gは、「テレビ視聴と家族との関わりを具体的に示すもの」として、「D. 家族と共に見るか」「E. テレビの内容を話し合うか」について問うたものである。結果はこの表にみられるとおり、「ア. だれかといっしょに見ることが多い」(58.6%)が最も多く、次いで「イ. ととききだれかといっしょに見る」(25.5%)であり、「ウ. たまにはいっしょに見る」(13.5%)、「エ. いつもひとりで見ると」(2.5%)は比較的少数であった。そして「E. いっしょに見ることが多い家族」として

は、「エ. 母」(49.7%)、「ウ. 父」(40.6%)が多くあげられており、「兄、姉、弟、妹」は18.2%～31.1%であったが、これはきょうだい数の少ない現状を反映しているのであろう。「ア. 祖父」(5.3%)、「イ. 祖母」(8.8%)と見る者も比較的少なかった。次に、「F. テレビ内容を話し合うか」についてみると、「イ. 番組によっては話す」(63.5%)が最も多く、次いで「ウ. あまり話さない」(14.4%)、「ア. よく話す」(13.8%)であった。また「エ. しない」(8.3%)者も少数ながら存在した。そして、「G. 話をしない理由」を問うてみると、「ア. 家族と話してもおもしろくないから」(28.4%)「ウ. 家族が忙しくて話をするひまがないから」(25.7%)が比較的多くあげられていた。以上の回答結果から推察してみると、「テレビがそこにあり、家族がそこにいる」からいっしょに見るのであり、また積極的に家族の話題となるほどの魅力的存在でもないように思われる。

次に、「H. 夕食時のテレビ」について問うてみた。夕食時には家族が揃いやすく、いわゆる家族団らんの時間となりやすいが、そこにテレビが介入することによって、家族間のコミュニケーションが阻害され、情緒的結合をも弱めるのではないかという懸念がないとはいえない。各家庭ではこのことについてどのように対応しているのかを問うてみたのである。この場合答えやすいように「きのうの夕食時」に限定して問うたのであるが、結果は「ア. つけていた」(50.6%)、「つけていなかった」(46.9%)とがほぼ相半ばしていた。この「夕食時のテレビ」については、さらにくわしい状況を知るため、「夕食時の会話内容とその程度」を、「テレビをつけていたグループ」と「つけていなかったグループ」別に比較してみた。表7はその結果を示したものである。この表にみられるように、それぞれの会話の内容、特に「ア. 学校でのできごとや友だちのこと」や、「エ. 家庭内のその日のできごと」を始め、「つけていたグループ」の方が「つけていなかったグループ」よりやや低い比率を示したものもあったが、いずれも有意差は認められなかった。一方「つけていたグループ」がその「ク. テレビの内容のこと」について話していた割合は34.9%とかなり高く、両者の話題の内容は多少異なっている、会話全体の量としてはほとんど差がないものと思われ、このことは「コ. 話しはしなかった」者が「つけていたグループ」(21.3%)と「つけていなかったグループ」(16.6%)とでさほど差がないことにも表われている。

次に、「I. テレビ視聴についての両親の指導」を問うてみると、結果は表6にみられるように、「イ. 長時

表6. テレビ視聴と家族関係との関わり

問	選 択 肢	性 別			問	選 択 肢	性 別			父 母 別			父			母		
		男子	女子	全			男子	女子	全	男子	女子	全	男子	女子	全	男子	女子	全
A （Aでついているのか） （二つ） （つ） （立）	ア. 非常に役立っている	10.0	9.6	9.8	E （Dでついているのか） （二つ） （つ） （立）	ア. 祖 父	6.9	3.6	5.3	I （Iでついているのか） （二つ） （つ） （立）	ア. 番組によっては見ないよう にいう	26.4	18.1	22.2	28.3	28.7	28.5	
	イ. かなり役立っている	50.0	63.9	57.1		イ. 祖 母	10.0	7.2	8.8		イ* 長時間見ていると注意される	49.3	47.7	48.5	71.7	72.0	71.8	
	ウ. あまり役立っていない	37.5	25.9	31.6		ウ. 父	41.3	38.0	40.6		ウ* 長時間見ていると切ってしまう	8.8	9.4	9.0	19.1	16.6	17.8	
	エ. じゃまになっている	1.9	0.6	1.2		エ. 母	41.9	54.8	49.7		エ. 信頼しているので何もいわない	8.1	8.1	8.0	5.3	5.1	5.2	
B （Aでついているのか） （二つ） （つ） （立）	ア. 話すときの共通の話題が ふえたから	42.7	44.3	43.6	F （Fでついているのか） （二つ） （つ） （立）	ア. よく話す	11.9	15.7	13.8	J （Jでついているのか） （二つ） （つ） （立）	ア. 自分の親と比べうらやましい と思う	23.8		31.3			27.6	
	イ. みんなが集まる時間がふ えたから	35.4	32.0	33.5		イ. 番組によっては話す	62.5	64.5	63.5		イ. 自分もそんな父親（母親） になりたいと思う	38.1		53.6		46.0		
	ウ. 父母の子どもへの理解が 深まったから	3.1	2.5	2.8		ウ. あまり話ししない	16.3	12.7	14.4		ウ. 本当にそんな父親（母親） はいないと思う	25.6	*	21.1		23.3		
	エ. テレビから家族のことで 教えられることが多いから	14.6	17.2	16.1		エ. しない	9.4	7.2	8.3		エ. 何とも思わない	39.4		19.9		29.4		
C （Aでついているのか） （二つ） （つ） （立）	ア. お互いに話ができないから	46.0	50.0	47.7	G （Gでついているのか） （二つ） （つ） （立）	ア. 家族がうるさくいうので いやだから	4.9	3.0	4.1	オ. その他	4.4	*	8.4		6.4			
	イ. 家族が集まる時間が減っ たから	20.6	6.8	15.0		イ. 家族と話してもおもしろ くないから	29.3	27.3	28.4	無 答	1.3		0		0.6			
	ウ. テレビに出てくる家族が うらやましく、自分の家 族がつまらなく思えるから	1.6	2.3	1.9		ウ. 家族が忙しくて話をする ひまがないから	22.0	30.3	25.7	ア. 自分のきょうだいと比べ うらやましいと思う	29.4		28.3		28.8			
	エ. テレビを見るとしかられ るから	12.7	15.9	14.0		エ. 家族も自分もテレビはあ まり見ないから	9.8	6.1	8.1	イ. 自分もそのような兄（姉、 弟、妹）になりたいと思う	25.0		24.1		24.5			
D （Aでついているのか） （二つ） （つ） （立）	ア. だれかといっしょに見る ことが多い	53.8	63.3	58.6	H （Hでついているのか） （二つ） （つ） （立）	ア. 家族がうるさくいうので いやだから	4.9	3.0	4.1	ウ. 自分もそのような兄（姉、 弟、妹）がほしいと思う	25.6		54.8		40.5			
	イ. とときどきだれかといっ しょに見る	28.8	22.3	25.5		イ. 家族と話してもおもしろ くないから	29.3	27.3	28.4	エ. 本当にそんなきょうだい はいないと思う	17.5	*	13.9		15.6			
	ウ. たまにはいっしょに見る	15.0	12.0	13.5		ウ. 家族が忙しくて話をする ひまがないから	22.0	30.3	25.7	オ. 何とも思わない	35.0		13.9		24.2			
	エ. いつもひとりで見ると 無 答	2.5	2.4	2.5		エ. 家族も自分もテレビはあ まり見ないから	9.8	6.1	8.1	カ. その他	3.8	*	4.8		4.3			
E （Eでついているのか） （二つ） （つ） （立）	ア. だれかといっしょに見る ことが多い	53.8	63.3	58.6	I （Iでついているのか） （二つ） （つ） （立）	ア. 家族がうるさくいうので いやだから	4.9	3.0	4.1	無 答	1.3		3.0		2.1			
	イ. とときどきだれかといっ しょに見る	28.8	22.3	25.5		イ. 家族と話してもおもしろ くないから	29.3	27.3	28.4									

表7. 「H. 夕食時のテレビ視聴」と会話との関連

項目別 区分 会話内容	男女別		夕食時のテレビ状況別		全
	男子	女子	つけていた	つけていなかった	
	%	%	%	%	
ア. 学校のできごとや友だちのこと	46.9	65.1	50.3	62.4	56.1
イ. 父の仕事や生活のこと	6.9	5.4	6.5	5.7	6.1
ウ. 母の仕事や生活のこと	4.4	4.8	4.1	5.1	4.6
エ. 家族内のその日のできごと	24.4	31.3	24.9	31.2	27.9
オ. 親戚や近所のこと	7.5	10.8	8.3	10.2	9.2
カ. 自分が思っていることや考えていること	14.4	25.3	19.5	20.4	19.9
キ. 勉強や塾のこと	8.1	6.6	10.1	4.5	7.4
ク. 食べながら見ていたテレビの内容のこと	18.8	17.5	34.9	—	18.1
ケ. 最近テレビ、ラジオ新聞で見聞いたこと	18.1	9.0	13.6	13.4	13.5
コ. 話はしなかった	21.9	16.3	21.3	16.6	19.0
サ. その他	6.3	4.8	7.1	3.8	5.5
無 答	0.6	0.6	0	1.3	0.6

間見ていると注意される」(父48.5%, 母71.8%)が最も多く、次いで「カ. 勉強がすんだら見てもよいという」(父23.6%, 母37.5%), 「ク. いい番組だと見るとをすすめる」(父34.0%, 母28.2%), 「ケ. 食事のときは見ないようにいう」(父24.9%, 母32.4%), 「ア. 番組によっては見ないようにいう」(父22.2%, 母28.5%)などがほぼ同程度にあがっていた。尚、選択肢欄の*印は父母間に有意差のあることを示しているが、全般的にみると母親の方が父親よりもよく注意を与えているようである。

次に、「J. テレビで理想的な父母像を見たとき」「K. 理想的なきょうだい像を見たとき」の情緒的反応を問うてみた。これは、人生経験の未だ乏しい中学生たちは、ドラマとはいえやはりそこに何かを感じとり、それが将来の家族観を形成する上で影響を与えるのではないかと考えたからである。結果はこの表にみられる通り、「J. 理想の父母像」に関しては46%の者が「イ. 自分もそんな父親(母親)になりたいと思う」と答えていた。また「ア. 自分の親と比べうらやましいと思う」者も27.6%と比較的多かった。しかし、「ウ. 本当にそんな父親(母親)はいないと思う」(23.3%), 「エ. 何とも思わない」(29.4%)というように冷静に受け止めている者もまた一方にはみられた。

次の「K. 理想的なきょうだい像を見たとき」については、「ウ. 自分もそのような兄(姉, 弟, 妹)が欲しいと思う」が40.5%で最も多く、次いで「ア. 自分もきょうだいと比べうらやましいと思う」(28.8%), 「イ. 自分もそのような兄(姉, 弟, 妹)になりたいと思う」(24.5%)が比較的多かった。また「オ. 何とも思わない」(24.2%), 「エ. 本当にそんなきょうだいはいないと思う」(15.6%)と冷静に受け止める者もみられた。このように、過半数の者はテレビの中の父母像、きょうだい像に何らかの情緒的反応を示しており、このことは、テレビがその家族観形成に与える影響も大きいことを示唆するものといえよう。尚ここで注目すべきことは、前述のA～Iまでの項目に関しては、男女間の比率に有意差は認められなかったが、このJ, Kに関しては明らかに男女差が認められたことである、すなわち女子の方が男子に比べ、より強い情緒的反応を示し、一方男子は比較的冷静に受け止める傾向があるといえそうである。

2. 両親との対話の実態と意識について

以上、中学生のテレビ視聴の実態と意識を種々の観点よりとらえてみたのであるが、同じテレビでも、その「家族関係における有用意識」では肯定的評価と否定的評価と全く相反する評価が与えられていた。そして、そのことを裏書きするかのよう、家庭の中でのテレビ視聴の実態もさまざまであることがうかがえた。そしてまた、このような評価のちがひ、視聴形態のちがひの基盤には、家族相互の心情的結合の強さ如何ということがあつたのではないかと推察された。そこで次には、対象中学生の家族関係、中でも最も中核となっている親子関係に焦点を絞り、両者間の対話の状況より親子間の心情的な結合関係を明らかにし、これらとテレビ視聴との関連性を探ってみることとした。

ここではまず、両親との対話の実態と意識についての調査結果を述べる。調査項目は、(A)両親との対話の程度、(B)両親に話しかけるときの感情、(C)両親と話したあとの満足感、(D)子どもからみた両親のタイプの4項目であり、その回答結果は表8に示すとおりである。

この表を概観してみると、「いつもよく話す」のは父親(26.3%)よりも母親(54.7%)の方であり、「別に何とも思わない」と抵抗感なく話しかけやすいのも父親(75.8%)よりも母親(91.3%)であり、また、対話のあと「話すとうわかってもらえるし、たよりになる」のも父親(70.0%)よりも母親(79.6%)の方が高い比率を示した。また、男子よりも女子の方が、特に母親に対して

表8. 両親との対話の実態と意識

項目	選 択 肢	父 母 別 性 別		父親に対して			母親に対して		
		男子	女子	全	男子	女子	全		
(A) 両親との対話の程度(一答)	ア. いつもよく話す	23.0	29.5	26.3	46.1	63.1	54.7		
	イ. ふ つ う	52.7	47.0	49.8	46.7	29.3	37.9		
	ウ. あまり話さない	22.3	22.8	22.6	5.3	7.0	6.1		
	無 答	2.0	0.7	1.3	2.0	0.6	1.3		
(B) 両親に話しかけるときの感情(一答)	ア* 別に何とも思わない	75.7	75.8	75.8	86.8	95.5	91.3		
	イ* 何となくはずかしい	7.4	10.7	9.1	3.3	0.6	1.9		
	ウ. 話してもおこったり相手にしてくれないので話しかけない	6.1	2.0	4.0	2.6	0.6	1.6		
	エ. 話をする機会がない	2.7	7.4	5.1	2.6	1.9	2.3		
	オ. そ の 他	1.4	3.4	2.4	0.7	1.3	1.0		
無 答	6.8	0.7	3.7	3.9	0	1.9			
(C) 両親と話したあとの満足感(一答)	ア* 話すとわかってもらえるし、たよりになる	71.6	68.5	70.0	77.6	81.5	79.6		
	イ. 話してもわかってもらえないし、たよりにならない	7.4	12.1	9.8	6.6	8.9	7.8		
	ウ. 話してもすぐおこったり相手にしてくれないので不満だ	7.4	3.4	5.4	7.2	4.5	5.8		
	エ* ほとんど話さないのではわからない	4.7	11.4	8.1	2.6	0.6	1.6		
	オ. そ の 他	2.0	3.4	2.7	2.0	2.5	2.3		
無 答	6.8	1.3	4.0	3.9	1.9	2.9			
(D) 親子ともからみタイプ(一答)	ア. 自分のことをよくわかってくれ、やさしい	26.4	30.9	28.6	35.5	38.9	37.2		
	イ. 自分のことをよくわかってくれ、きびしい	35.1	37.6	36.4	35.5	42.7	39.2		
	ウ. 自分のことをわかってくれるが何もいわない	11.5	10.7	11.1	9.9	4.5	7.1		
	エ. 自分のことをあまりわかってくれないが、やさしい	10.8	10.7	10.8	5.9	6.4	6.1		
	オ. 自分のことわかってくれず、きびしい	5.4	3.4	4.4	4.6	4.5	4.5		
	カ. 自分のことをあまりわかってくれないし、何もいわない	3.4	4.0	3.7	0.7	1.3	1.0		
無 答	7.4	2.7	5.1	7.9	1.9	4.9			

注：選択肢欄の*印は、父母間で有意差のあることを示す。

は、「いつもよく、気楽に」話しかけている傾向がみられた。また、大多数の中学生は自分の両親を「よくわかってくれる」存在と認めているようであった。

尚、以上の(A)~(D)はそれぞれが相互に関連し合っていることが確かめられた。(資料は省略)ここでは「(A)両親との対話の程度」と、他の3項目すなわち両親への親和感を示す、と考えられる項目との間の関連性についてのみ述べることにする。表9はその結果を示したものである。すなわち、「(A)対話の程度」を「ア. いつもよく話す」「イ. ふつう」「ウ. あまり話さない」の3グループに分け、他の(B), (C), (D)項目との関連をみたところ、この表に示すようになりかなり顕著な関連性が認められた。すなわち、「ア. いつもよく話す」グ

ループは他の2グループ、特に「ウ. あまり話さない」グループに比べ、対話時の話しかけやすさも、対話後の満足感も高く、また、両親を「よくわかってくれる」タイプとみている傾向が強いようであった。

3. テレビ視聴と両親との対話状況との関連について
以上のように、両親との親和関係は、その対話の状況にかなりよく反映していることが認められた。従ってテレビ視聴と親子間の心情的結合との関連性は、対話状況との関連をみることによってかなり明らかにし得るものと思われる。

表10は、さきに述べた「テレビ視聴の実態と意識」の中の、家族との関わりを示すものとしての「A. テレビ

表9. 「(A) 両親との対話の程度」と親和感との関連

項目	選 択 肢	父 母 別		父 親 対 して			母 親 対 して		
		対 話 の 程 度		アいつもよく話す 78人	イふつう 148人	ウあまり話さない 67人	アいつもよく話す 169人	イふつう 117人	ウあまり話さない 19人
				%	%	%	%	%	%
(B) 両親に話しかけるときの感情(一答)	ア. 別に何とも思わない			98.7	83.1	37.3	96.4	88.9	68.4
	イ. 何となくはずかしい			0	7.4	22.4	0.6	2.6	10.5
	ウ. 話してもおこったり相手にしてくれないので話しかけない			0	4.7	10.4	0	4.3	0
	エ. 話をする機会がない			0	1.4	19.4	0.6	1.7	5.3
	オ. その他 無 答			0 1.3	2.0 1.4	6.0 4.5	1.2 1.2	1.7 0.9	5.3 10.5
(C) 両親と話したあとの満足感(一答)	ア. 話すとわかってもらえるし、たよりになる			92.3	77.7	31.3	89.9	69.2	57.9
	イ. 話してもわかってもらえないし、たよりにならない			2.6	8.1	20.9	3.0	12.8	21.1
	ウ. 話してもすぐおこったり相手にしてくれないので不満だ			0	6.8	9.0	2.4	10.3	5.3
	エ. ほとんど話さないのわからない			1.3	1.4	31.3	0	2.6	10.5
	オ. その他 無 答			1.3 2.6	2.7 3.4	4.5 3.0	2.4 2.4	2.6 2.6	0 5.3
(D) 子どもから見た両親のタイプ(一答)	ア. 自分のことをよくわかってくれ、やさしい			44.9	30.4	10.4	41.4	32.5	31.6
	イ. 自分のことをよくわかってくれ、きびしい			38.5	37.2	34.3	41.4	41.9	10.5
	ウ. 自分のことをわかってくれるが何もいわない			9.0	12.8	10.4	5.3	9.4	10.5
	エ. 自分のことをあまりわかってくれないが、やさしい			2.6	10.8	17.9	3.0	7.7	26.3
	オ. 自分のことをわかってくれず、きびしい			1.3	3.4	10.4	3.6	6.0	5.3
	カ. 自分のことをあまりわかってくれないし、何もいわない			0	1.4	11.9	0	1.7	5.3
	無 答			3.8	4.1	4.5	5.3	0.9	10.5

は家族が仲よくするのに役立っているか」「D. 家族と共にテレビを見るか」「I. 夕食時のテレビ」の3項目及び「テレビの視聴時間」と、「(A)両親との対話の程度」及び「(C)対話後の満足感」との関連性をみたものである。

結果はこの表にみられるとおり、「(A)両親との対話の程度」の高いグループは低いグループより、「テレビは家族が仲よくするのに役立っている」と答えた割合が高く、また「家族と共にテレビを見る」割合が高く、「夕食時にテレビはつけていなかった」者も多い傾向がみられた。またテレビ視聴時間もやや短い傾向がみられた。尚以上の傾向は対父親、対母親のどちらにも同様に表われていた。次に「(C)両親との対話後の満足感」についてみてみると、「(A)対話の程度」と同様に、「ア. わかってもらえるしよりになる」と満足の意を表しているグループは、そうでないグループに比べ、やはり「テレビは役立っている」と答えた者の比率も、「家族と共にみる」者の比率も高く、「夕食時にテレビをつけていた」者の比率は低い傾向がみられ、また「視聴時間」もやや短い傾向を示した。尚、この傾向は父母いずれにも同様に表われていた。

次の表11は、「F. テレビの内容についての対話の程度」と、「(A)両親との対話の程度」及び「A. テレビの有用意識」との関連を表わしたものである。この表でみると、やはり「両親といつもよく話す」グループはそうでないグループに比べ、テレビ内容についてもよく話している傾向が、特に母親の場合に強くみられ、また、「テレビは役立っている」と答えたグループはそうでないグループに比べ、テレビ内容についても家族とよく話し合っている傾向がみられた。

尚、図1は、これまでに述べてきた親子間の親和感、

対話状況、テレビの視聴状況の三者間の相互関係をまとめて表わしたものである。

ま と め

以上述べてきたように、この調査研究では、まず中学生の家庭におけるテレビ視聴の実態と意識、並びに両親との対話状況からみた親子間の心情的結合関係を明らかにし、次いでこの両者間の関連性をみることによって、テレビ視聴が親子関係にどのような影響を及ぼしているかを探って来たのであった。そして、親子関係をこのような心情的内面にまで立入ってみると、これまでの表面的な実態や意識調査では余り分らなかったテレビ視聴の影響が、かなり明らかになったように思われる。すなわち、親子間の心情的結合が充分な家庭では、テレビ視聴時間はやや短い傾向にあり、夕食時にテレビ視聴をする割合も低く、テレビ視聴の際は家族と共に見ることも多い傾向がみられた。また、視聴した内容を家族と語り合うことも多いなど、テレビを家族間の親愛度を深めるために有効に利用しているためか、テレビは家族が仲よくするのに役立っていると感じている者が多かった。

これに対し、親子間の心情的結合が充分でない家庭では、すべて先に述べたのとは逆の傾向がみられた。このような家庭では、テレビが家族間の結びつきを崩壊することをますます助長するという危惧が持たれる。

ただ、ここで留意すべきことは、親子関係がテレビ視聴に影響するのか、或いは逆に、テレビ視聴が親子関係に影響するのか、この調査結果では明らかでないということである。恐らくはその両面が相互に作用し合っているものと考えられる。しかし、子どもが生まれ落ちてからの長いつきあいである親子関係、或いはそれ以前の夫婦関係、或いは夫婦、親子を取り巻く家庭、社会環境などの、大きな生活基盤の中でのテレビ視聴であり、いわばテレビは生活の一部であるから、この場合やはり親子関係の存在をまず第一に考えるべきと思われる。

すなわち、親子関係の良否ということが、テレビ視聴のあり方にも影響し、ひいてはテレビの有用性をも左右すると考えるのが妥当であろう。もちろん、テレビ視聴に関する子どものしつけを無視してよいというのではない。やはり、テレビの視聴時間や夕食時のテレビのあり方に意を用い、また、できるだけ家族が共に視聴し語り合うよう心掛けるなどの配慮が、より良い親子関係、家族関係に有効であるということもまた、この調査結果は示唆しているのである。例えば「テレビの専有化」は、その点からみて望ましくない現象といえよう。

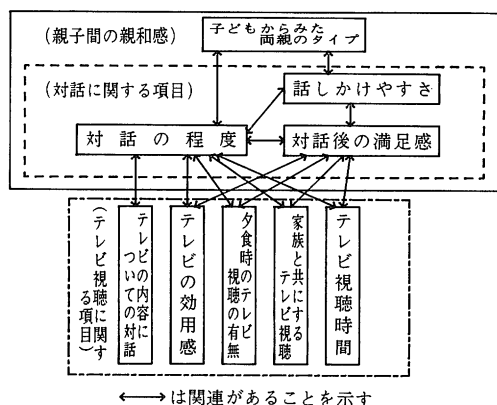


図1 親子間の親和感とテレビ視聴との関連

この調査結果ではまた、中学生たちがテレビに求めているものはその娯楽性であり、一方両親は、長時間視聴、それも勉強に支障を来たすことへのおそれからの注意に偏している傾向がみられた。また中学生たちは、テレビの中の親子、きょうだいの姿にかなり情緒的な反応を示すなど、テレビが心情面に及ぼす影響は決して小さくないことも示していた。

今後いっそう進展するであろう情報化社会のもとにあっては、子どもたちが必要とする好ましい情報を自ら選択し利用し得る能力を身につけることが重要な課題となっている。そのためにも家庭におけるテレビ視聴の指導はもっと積極的になされなければならない。また、家族の機能低下、ひいては家族崩壊の危機すら論じられる昨今にあっては、テレビが家族関係に与える影響にも充分意を用いて、その存在が家族融合のためにより有効に作用するよう心掛けたいものである。

終わりに、本調査研究に快くご協力下さった松江市立第二中学校の諸先生、生徒の皆様にも厚く謝意を表します。

引用文献

- (1) 堀川直義, 「家族崩壊とマスコミ」, 伊藤安二編著, 『家族崩壊の社会心理学』, 敬文堂, p. 283~295 (1979)
- (2) NHK放送世論調査所, 『幼児の生活とテレビ』, 日本放送出版協会 (1981)
- (3) NHK放送世論調査所, 『家族とテレビ——茶の間のチャンネル権——』, 日本放送協会 (1981)
- (4) 深谷昌志, 『孤立化する子どもたち』, 日本放送出版協会 (1983)